

槐

かい

岡井省二創刊

平成16年5月号

平成十六年五月一日発行 第十四巻第五号 通巻第一五五号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



宇宙塵

高橋将夫

春障子金剛鈴の鳴りにけり

早春のざわざわとする山河かな

雪解水岸边の雪を巻き込みし

お国忌の風呂の湯抜いてありにけり

猩々の後ろに桃の花の精

春眠の途中冥府に寄りにけり

雪代に魔除けの札の流れをり

あの時のこの一曲の冴返る

祝 北嶋美都里句集

貝寄風にたなびく紫雲西の峰

春風に吹かれてをりし宇宙塵

蝌蚪の群星の渦より生れたる

春 暁
片岡静子

きさらぎの流れてみたるころざし
大あくび空に向かひて蒲団干す
臨月の腹けつてをりひひなの子
チヂミ焼くホットプレート春の月
飯蛸の取りもつ縁でありにけり
旧正の大 蒜 畑 静 かなり
夏蜜柑サイクリングの列行けり
トンポウロレシピ三枚四月馬鹿
大部屋の輪になつてゐる春の夕
ケンケンパ跳ぶことが好きふきのたう

特別作品

石 けり の 石 薄く あり 桜 餅
風 船 の 空 気 ゆる み し 余 寒 かな
春 風 や ジ グ ソ ー パ ズ ル 九 ピ ー ス
単 線 の は る かな り けり 大 根 畑
二 連 結 電 車 過 ぎ 行 く 土 筆 かな
は つ け よ い の こ つ た の こ つ た 日 脚 伸 ぶ
ド ロ ッ プ の 缶 振 る 音 と 春 の 風 邪
ロ ー ル パ ン 春 暁 の 空 明 け に けり
春 の 池 飛 び 立 つ 前 の 青 い 鳥
池 の 名 を 知 る 由 も な し 春 の 鮒

槐安集

市場基巳

亀睡り落ちて十日も過ぎにけり
かいつむり一人遊びに慣れてゐる
鴨あまたゐて声なきも寒ならめ
恋猫の真昼はことのほか静か
鴨昼寝日の岸にゐて楽しめり

水野恒彦

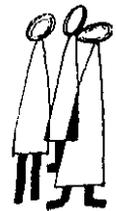
天つ辺の椿に声のあるやうな
永き日の波に生まるる波のかげ
耳は胎児のかたち海市かな
その上に斑雪山あり謡かな
ししむらや銅洗あかがねふ雪解川

石脇みはる

きさらぎの川原とびたつ鳥ゐたり
薄氷のひかりを受くる櫟山
まなざしの谷うぐひすの初音かな
梅の山から船乗りのいでたちぬ
まんさくの峽へ向ひし二人かな

竹内悦子

足湯して雪の中なり薬師堂
マント脱ぐや海わたらみのいろ木々の色
吊皮の踊つてゐたる春の闇
縮緬の端切れ日永の空のあり
潮流れ菜の花畑ばかりかな



木下野生

うつすらと雲の流れをつくしんぼ
立てかけて一本の棒春の暮
大雨になつてしまひし露の臺
棒切れの流れてきたり春の川
軍艦のきてゐる港夕霞

中島陽華

夜叉五倍子やちかつあふみの波がしら
先生の大き親指猫の恋
きさらぎの朝日の光とチヨコレート
枯葉一斉に立ち舞ひ日イ燦々
高階の小町の面春隣

延広禎一

猩々のまぎれてゐたる海市かな
カーナビに問ひをる行方諸葛菜
酔つて候まばゆき春の霰かな
あまのじやくの息臺の息飛火野に
海市待つ神々逆さ睫目かな

栗栖恵通子

きさらぎの口開いてをる頭陀袋
清心が世話だんまりの白魚端
抱き寄せて春田のものを刈りにけり
将門に二月の膝を貸してをり
じぐざぐに春大根の穴がある

加藤 みき

あたらしき靴音あふれ春の靄
鳩尾みぞおちに手のひらを置く浅き春
樟脳もわれも春日の影にあり
流れ出す森の芥や春の星
白詰草地を這ふ風のいくたびも

大島 翠木

春寒は風の一樹のさるすべり
梅東風にきりこんで来る鳥のあり
金縷梅に風ひらひらと木霊呼ぶ
一湾の春月海をすみかとし
春は曙女竹の揺れのきはやかに

岡井省二全句集

句集『明野』から『大日』までの
全句集十一巻を収録。
解題、年譜付き、A五版、五〇〇頁。

定価三、八〇〇円（消費税込）

角川書店発行（平成十五年十一月）

申込先 千五三六一〇〇〇八
大阪市城東区関目二丁目一三一―二
高橋邦夫
〇六一六九三四―五四九〇

北嶋美都里句集

「西の峰」 本阿弥書店発行

定価二、八〇〇円（消費税別）

申込先 千五七〇一〇〇九八
守口市新橋寺町四―八
北嶋美都里 宛



槐市集

秋岡朝子

乳呑児を抱かせてもらふ春隣
春一番口を開けたる桶の貝
春待つや鳩のごとくに豆食べて
ゆらゆらと軽き舟浮く冬の川
冬の暮ころべばころぶ影法師

天野きく江

今様の海幸山幸干潟かな
近く見し干潟のまはり音のして
蜜に来て羽根鳴らす鳥遊糸かな
菜の花や牛の匂ひの三角に
過去の恋言わずもがなの春嵐

雨村敏子

湯通しの蓮根にある粘りかな
石垣は昼の日ざしや桑を解く
貝鳴らす音のありけり桜餅
日の中に鹿の子もぬたる水の際
春の山栗まんぢゆうに焦げ目かな

岩月優美子

冴返る五百羅漢の葛折り
常楽会ときどき亀の現はるる
ひたすらに清き音なり雪解水
悉くピカソの青の芽吹きかな
サファイアの煌めき昼の犬ふぐり



槐集

高橋将夫選

春の日や陀羅尼だらにと草のみち

枚方

雨村 敏子

丹砂刷く春満月のオブラート

枚方

中野 京子

西の峰の日当つてをり露のたう

赤牛の仏眼仏母豆の花

節分の鬼がうしろを向きにける

白雲のふくらみはじめ花菜和え

蜜蠟を溶かしてをるや亀鳴ける

仰ぎゐる面面や春の空

うらうらと扇骨干さる喉佛

それぞれの眠りに入る春の闇

身心に水流れゐる春野かな

白書院波濤のふすま春うごく

谷村 幸子

方舟に積まれし白きチューリップ

方丈の杉戸絵うすれ楓の芽

母と子の鱈を焼いてをりにけり

走り来し童女がくれし露の臺

東京のまん中にゐて蜜柑むく

春一番ゆつくりシチュー煮てをりぬ

恋猫の帰つてきたる神の庭

紅梅や庫裏豪快な門跡寺

霊水の薄氷動きはじめたる

穴出でし蛇に金剛界のあり

福岡

近藤 喜子

拭ひたる金剛杖の春の泥

春雲のひろがり阿弥陀来迎図

潮待ちの舟に束の間牡丹雪

蝮の道ゴシック体でありにけり

薄氷や釈迦堂門前童唄

春雷や志功の文字の躍るなり

耕しの弧のゆるやかに鍬光る

わたつみを呑みては吐きて大浅蜷

銀河往来 高橋将夫

― 季語の効用 ―

『槐(平成十三年七月号)』で「季語の行方」として季語について考察した。そこで、「季語の本質を論じるより、今は季語の有効活用をはかることの方が大切」と述べた。

これとの関連で、『みちのく(2月号)』(原田青児主宰)の「花の手箱―結社誌作品展望」に掲載されている園部孤城子氏の俳句鑑賞文の一節を紹介させていただく。

|| 十六夜の携帯マナーモードとす 高橋 将夫
最近の携帯電話は、新しい機能がつぎつぎに開発され、カメラはおろか、テレビまで附加されているという。

半面、例の出会い系サイトなど、社会問題にもなっている。一方、着信音の方も、メロディーのものが殆どのものであるが、犬や猫など、動物の鳴き声のものまであるそうである。

この着信音が電車や会議席で突然、鳴り出すことがある。実に、迷惑な話である。車掌がよく、携帯電話はマナーモードに切り替えるよう、車内放送をしている――。

掲句は、このようなことを背景にして詠まれている。すなわち、何かの会合で、あたりに迷惑をかけないように、マナーモードのボタンを押し、着信音がでないようにしたというのである。ただ、それだけのことであるが、十六夜という情緒纏綿の季語にまつたく異質の携帯電話を配し、しかも、外来語マナーモードを使って、この季語を現代的に消化化したことに感心した。実に、斬新で意表を突いた句であると思う。 ||

春の日や陀羅尼だらにと草のみち 雨村 敏子
春の道を行く霧囲気に「だらに」の音感が実によくマッチしている。ところで、この「陀羅尼」とは真言、秘呪である。これだけ敬虔な呪文を一句に自然体で盛り込める作者の力に感服。

身心に水流れぬる春野かな 谷口佳世子
春の野を流れる水のさわやかさ。身も心も洗い清められる。そんな感じがよく伝わってくる。

霊水の薄水動きはじめたる 近藤きくえ
薄水の動きはじめた微妙なところを捉えている。しかも、ただの薄水ではない。霊水の薄水なのである。

赤牛の仏眼 仏母 豆の花 中野 京子
赤牛の眼がまるで仏さまのような慈愛に満ちたまなざしだという。豆の花のようだという。ちなみに仏眼仏母は一切佛眼金剛吉祥一切佛母尊といい、一切を見通す智の力を尊格した尊像。

白書院波涛のふすま春うごく 谷村 幸子
白書院は表向きの行事に使用される正式の間。そこにある「波涛のふすま」を前にして、波の動きを、さらには春の動きを感じている。

わたつみを呑みては吐きて大浅蜷 近藤 喜子
浅蜷が海水を飲み、吐いている。それだけのことだが、大浅蜷が大海を呑んで吐くという表現のスケールの大きさは俳諧。